い。ブッダはヒンドゥー教に取り込まれて、第九位の聖者となったから、この場合、仏塔の作品からの転用としてもおかしくない。

大ストゥーパのもとの姿をしのぶ手掛かりとなるのが、デカン高原北部のサーンチーに現存する紀

文化

に対して、精神的緩緩を経て大地から天に上昇した仏教やジャイナ教の神性は全く異なる」と語る。その精神性が初期仏教美術に優雅な表現を与えたというのだ。

しかし、アマラーヴァティー彫刻の躍動する群像に比べ、サーン

アート・アトラス・・・

若手映像作家が伸びるクロアチア

クロアチアの首都ザグレブで、「メディアスケープ」というシンポジウムが六月末に開かれた。砲撃の記憶も生々しい、まだ国土の一部が占領されている国での映像とメディアに関する国際会議に、十カ国以上から研究者やアーチストが集まった。

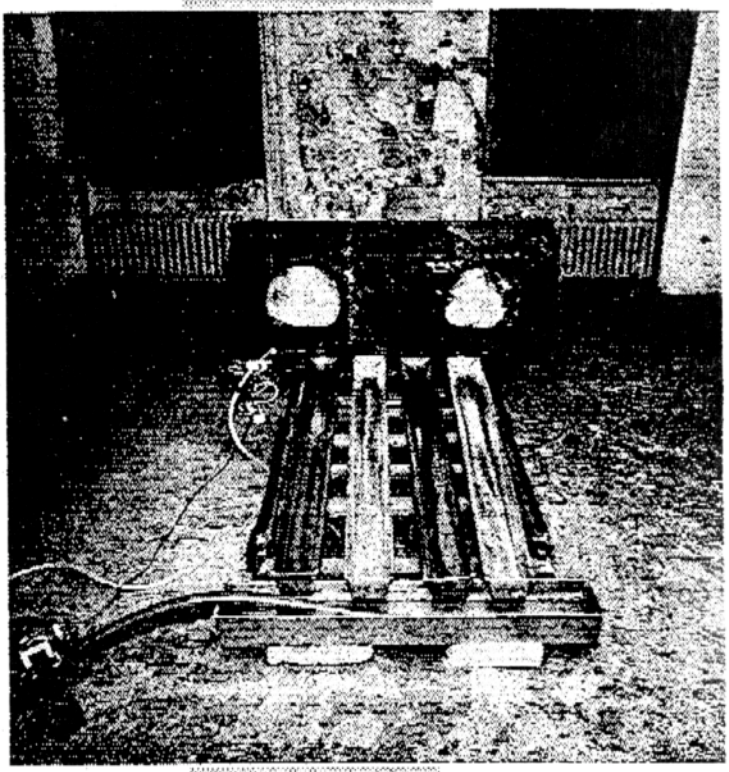
私も参加したが、意外にも、ザグレブには戦争の影が感じられなかった。街角のカフェは近所の人たちでにぎわい、街全体に活気がある。公費で古い建物の化粧直しが進み、純石（しきいし）を敷き詰めて歩行者天国にするなど、急ピッチの整備は観光客や西側資本の誘致への思惑もあるのだろうが、人々の表情には自分たちの国を持ったという誇りと明るさがあふれているように見えた。たまに見かける迷彩服の兵士や平和維持軍の外国人以外は平和そのものだ。

ポーランド、チェコ、ハンガリーなど東欧各国からの参加者による自国の最近作の紹介もあった。アートやメディアの内容の空洞化が話題になる日本に比べて、メディアが果たす役割を痛切に感じ、社会の変動や価値観の変容に直面している彼らは、メディアの役割を真剣に論じていた。「メディアの終焉（しゅうえん）」といったようなことをスタイリッシュに語ったアメリカの学芸員は「あなたは真剣に考えているのか」と質問攻めにあった。

また、シンポジウムと連動して、クロアチアやほかの東欧の映像作家による展覧会が市内各所で開かれた。聞けば、戦争のさなかの九二年に優れた若手たちが出現したという。以前から活動していた作家が、戦争や社会の激変を直接的なテーマとしているのに対して、国内の大学に学び、外国滞在の経験の全くない純然たるクロアチアの若者たちは、社会の変動に対して内省的な視線で、いわば「失われた世代」の感覚を表現し始めたようだ。

彼らは、十年来ビデオ・インスタという形式によってとの拠点で語りはもともと、ビジュでは優れた実績をった旧ユーゴ。ような映像文化がろ。

（星原真知子・ト評論＝東京工芸



クロアチアの若手作家ダボール・メクのビデオを使ったインスタレーシ（東京展示）＝ザグレブ市内の画廊